

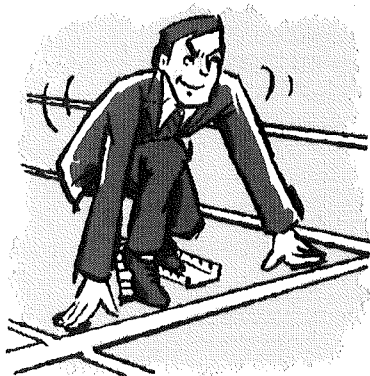
毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

陸上でも水上でもスタートは大切だ。短距離になればなるほど、特にスタートは微妙である。何時間もかけて走るマラソンならば多少趣は異なるが、スタートで遅れをとると、もう勝てない。

吉岡隆徳（一九〇九〜八四）といえば短距離において世界的に有名な選手で、特にスタートダッシュは天下一品だった。足をハの字型にしてまず三歩飛び出す。つま先が内側を向いた形で右、左、右と出る。スピードスケートのスタートの形に似ている。体も稲妻型に振られ、低い体勢には加速がつきやすい。何年もかかって編み出したこの「ハの字型三歩説」による「暁の超特急」というそのニックネームは、アメリカのトラン選手の「深夜の超特急」とともに、当時人口に膾炙した。

さて一般的に、正月はその年のスタートなどと言われている。また、朝は一日のスタートとも言われる。吉岡選手でなくても、スタートがまずいと、その年、その日は遅れをとったり、うまくいかなかったりする。では、どうしたらスタートがうまくできるのか。

よく考えてみると、人間は時間の中に生きている。一日のスタートは朝にあるというが、一時間ごとに区切ってみると、たとえば九時のスタート、十三時のスタートというようになるのであり、さらに三十分ごと、十分ごと、



何事も最初が肝心

丸山竹秋

いや一分ごと、そして一秒ごとにスタートがあるということになる。これをきりつめると、いつもスタートだということになる。

スタートはまずかったが、後はうまくいったという場合はいろいろとあるもの。しかし、その「後はうまくいった」というのは、スタートなんかどうでもよい、という姿勢からは絶対に生まれません。

人間だから、スタートでつまづくことはある。最初は失敗だった、ということはいくつもある。しかし、次第に気を立て直して、そのつまづきから教訓を学びとり、これをプラスに転じて、最後は成功したという例は、これまたいくつもあるのである。

こうした場合、なぜ成功したかといえば、つまづきや失敗を活かすという心構えがあったからで、そうした心構えは、やはり不断の研鑽から生ずるものである。研鑽と言うと、大げさで堅苦しいが、日常の生活の中からそうした実践を抜きにして、だらけきっていると、つまづいたらそれっきり、失敗しても立ち直ることができないようになってしまう。

私たちは、厳しい練習鍛錬には耐えられないだろうし、またその必要もないかもしれない。しかしすべての人は、他の人になんか独特の個性を持っているのであり、その意味では世界的な存在である。つまり、唯一無二のあなた自身であり、私自身なのである。ただ名前が知られていないだけだ。

今がスタートだ、という気持ちで、現在の仕事にまごころを尽くす。これが生き生きとした人生なのだ。

〔繁栄の法則〕より

1/3(土) まいど! 倫理が、何度もやってくる苦難を「あの時の経験が
あったから今の自分が存在する」そして何度もやってくる苦難

今週の

倫理

「ここから」の気持ちで切り替えて
再スタートです。

2024. 1. 13 ~ 2024. 1. 19

1月のテーマ | 始動

新島マホ 1368号

予期せぬ出来事、予測できない事態が頻繁に発生する現代は、今後の行く先の予測が難しい時代と言えるでしょう。こうした時代と向き合うには、「今、ここ」に意識を向け、真剣に生き抜くことより他はありません。

「今、ここ」とは、自分が置かれている環境がベストと受けとめ、目の前のことに懸命に取り組むことです。今、置かれている状況を冷静に把握して、少しでもより良くするために、自分にできることは何なのかを真剣に考えていくことが大切です。

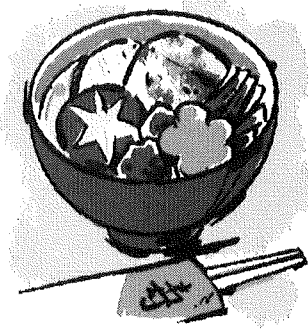
そうすると、未来に対する不安が軽減され、置かれている状況が良くなってくると、どんなに苦しい過去があったとしても、「あの時の経験があったから今の自分が存在する」と肯定することができるのです。逆に、今を疎かにして状況を悪化させると、過去の良き行ないさえも否定し、未来が不安なものになってしまうのです。倫理研究所創設者の丸山敏雄は、次のように述べています。

「今日はまたとめぐって来ない。昨日は過ぎ去った今日であり、明日は近づく今日である。今日の外に人生はない。人の一生は、今日の連続である。(中略)一日は今の一秒の集積である」

(『万人幸福の葉』)

元プロ野球選手のA氏は、苦しいことや辛いことがあると「ここから」と気持ちを切り替えることがプロとして活躍できた要因だと振り返ります。

A氏は高校時代からプロ野球チームのスカウトに注目される存在で、大学入学後も即レギュラーとして活躍をしました。



何度もやってくる苦難を 前向きな気概で吹き飛ばそう

しかし、入学して数カ月後、試合中に相手選手と接触し、左膝の十字靭帯と後方の靭帯が同時に断裂するという大怪我にまわれまわりました。その影響で大学時代は、ほぼリハビリに費やすことになったのです。三年生の頃から膝の状態も少しずつ回復し、練習に参加しますが、自分の思い描いたプレーができず、涙する日が続きました。

そんな辛い日々の中でも、その都度「ここから」と前向きさを取り戻し、練習を継続しました。その結果、社会人野球の選手として就職を決めることができたのです。

社会人チームでは、レギュラーとして結果を出し続け、再びプロへの道が見え始めた三年目のことです。今度は練習中に足首の靭帯を断裂してしまつたのです。へまた怪我が、と病院のベッドの上で涙します。

幸いにも六カ月で練習できるまでに回復し、「ここからもう一度」と身体づくりに取り組み、練習を再開しました。しかし、復帰後、試合で結果を出せず退社することになったのです。それでも、「ここから」という気持ちは消えず、草野球チームに所属し、数年後にプロ野球チームの入団テストを受け見事合格を果たしたのでした。

後悔することは誰しもあるでしょう。しかし、過去を振り返るばかりでは、前進はありません。A氏のように、何度でも「ここから」と気持ちを切り替えて、今を精一杯生きることが大切です。どんな逆境も前向きな心で再スタートを切り、自己の未来を切り開いていきましょう。